特集 再考 インプットの質と量

リーディングを通してインプットを増やす工夫

森 千鶴
（福岡教育大学）

1. リーディングを通してのインプット

Krashen が 1980 年代半ばに提唱したインプット仮説を引用するまでもなく，インプットの質と量は外国語教育における重要な課題である。日本のような EFL 環境においては特に，英語の授業時や授業外において，いかにして良質で多量のインプットを得るかが学習者の成功を左右するといっても過言ではない。学習者は質のよいインプットを多量に受けることで，その外国語に慣れることができるし，意味がわかってもわからなくても，繰り返し出てくる語彙や文法にはおのずと注意が向けられ，将来の習得につながる。ここではリーディングや，リーディング関連活動を通して，いかにして良質で多量のインプットを得ることができるか，その方策を考える。

2. トップダウン処理を用いたリーディング

リーディングの過程には，ボトムアップ処理とトップダウン処理があることはよく知られている。熟達した読み手はどちらか一方の処理だけを用いているわけではなく，ボトムアップ処理を基本としながら適宜トップダウン処理を用いるなど，両方を補完的に使いこなして読んでいると言われる。そこで学校教育においては，学習者にこれら両方のリーディング処理過程があることを教えることが望ましい。またインプットの量という視点で考えると，トップダウン処理を学んでいた方が，多量のインプットを受けやすい。というのも，一語一文に着目して正確に読むことを第一義とするボトムアップ処理では，おのずとリーディング・スピードが遅くなり，結果として得られるインプットの量も少なくなりがちだからである。

そのように考えると，新出語彙や新出文法を学習しつつ本文を読み進める平成 18 年度版 *NEW CROWN*（以下 *NC*）の教科書本文では，トップダウン処理に特化した読み方の指導は難しいということになる。トップダウン処理を学びインプットの量を増やすには，読み物教材の Let's Read が望ましいと言える。Let's Read は「読み」に特化した指導ができるよう，未習文法が出ず，未習単語には訳がつけられているからである。そこで，どのようにトップダウン処理を用いた読み方を指導するかについて，*NC2* Let's Read 2 "Zorba's Three Promises" を例にとって考えてみる。

(1) プレ・リーディング活動を行う

トップダウン処理とは，内容についての大まかな枠組みや内容を予測し，検証しながら読み進めていく方法である。そこで内容予測をより容易にするために，プレ・リーディング活動を行う。指導にあたっては，まず未習語を簡単に説明したのち，場面設定（ゾルバは黒猫で，ある日油まみれのカモメに出会う）と，プレ・リーディングの質問（「ゾルバはどのような役割を果たすでしょうか」など）にふれ，「猫」と「カモメ」といった通常は相容れない関係にある 2 者の間に何が起こるのかを予測させる。

(2) 話の始めから終わりまで，通して読ませる

自分が立てた予測に加え，イラストなども参考にさせながら，「わからないところがあっても，推測しながら読んでみよう」と生徒を励まし，読み進めさせる。内容そのものを理解することを重視し，80 ページから 83 ページまで通して読ませるようにする（制限時間を決めておいてもよい）。生徒が読み進める際に，各ページについている READING HINTS を参考にさせ，たとえば「ゾルバは卵をど

うしたか」などの大まかな内容がわかっていればよいことを伝え，文脈やイラストから感覚的に英語の表現をつかんでいくように指導する。

(3) 英問英答でしめくくる

読み終わったあと，生徒は POST-READING（83ページ）の英文の並べ替えを行う。生徒は話の大筋を確認できるし，もう1度，本文に立ち返ることで，英語のインプットを繰り返し得ることができる。また教師が内容に関する質問をしたり，感想を求めたりすることによっても，同じ効果を得ることができる（たとえば，What are Zorba's three promises? や Is it a happy story or a sad story? Why do you think so? など）。

3. 多読を授業に取り入れる

(1) 中学校における実践例

授業の中でインプットを増やそうとすると，教科書以外のインプット源を見つけ，授業中になるべく多く読ませることも必要となるであろう。まずそのためのヒントとして，福岡県の公立中学校に勤務する島津博文教諭による速読指導の実践例を紹介したい。多読と速読では，その目的において違いはあるが，速読も多読につながるという点で参考になると考えられるからである。島津教諭は，現在は多読指導を実践しているが，前任校である福岡教育大学附属小倉中学校では，速読指導の経験がある。島津教諭が中学校2年生のクラスで実施した速読指導の手順は次のとおりである。

1. 180語程度の英文をできるだけ速く読む。
2. 英文を隠して，True or False Questions などの内容を把握できたかどうかの設問に答える。
3. 読みの速度（WPM＝Words per Minute）を計算する。

こうした活動を異なる読み物で3回続けるうちに，生徒の WPM は 69.7 語→ 100.3 語→ 118.8 語と上昇していったと報告している。島津教諭は，生徒の読み方にも変化がみられたとして，「ざっと読んで内容をつかむ 'Skimming' のこつをつかんできているのではないか」と述べている（島津 2005, p.172）。

さらに島津教諭は，公立中学校の中学3年生の選択授業の際に，「100万語多読」（酒井・神田 2005）として紹介されている多読を実践し，その活動の留意点として，主に次の2点を挙げている（「英語教育リレーコラム（三省堂）」http://tb.sanseido.co.jp/english/column/relay_bc/20090309.html）。

1. 読んだ語数を記録していくことで，できるだけ多くの英語（単語・表現）に触れる。
2. 辞書は使用せず，自分が読めるものを読んでいくこととする。

そして，生徒が英語力と興味の点で，自分に合った本を見つけやすくするために，150冊の本をとりそろえているという。生徒に読ませたいおすすめのシリーズとして，STEP INTO READING（Random House USA），Penguin Young Readers（Pearson Longman），Oxford Bookworms Starters（Oxford University Press）を挙げている。

(2) 多読とほかの活動を組み合わせる

多読を家庭学習ではなく，授業中に実施する場合には，多読とペアワークを組み合わせることも可能である。異なる本を選んでいる2人の生徒をペアにさせ，20～30分各自で読んだあと，作品タイトル，作家名，またその日読んだページ数などを Quick Book Report に記入させる。そののち，互いの本について報告させる。簡単なことであれば，英語でやりとりさせる。たとえば A: What kind of book is that? B: It's a mystery story. などである。このようにすると，reading から speaking への技能統合が可能となり，生徒同士の英語ではあるが，音声のインプットが増えることにもつながる。また相手の読んでいる本に興味をもって，次は自分も読んでみよう思う動機づけにもつながる。

このように多読や多読に関連した活動は，インプットが限られがちな EFL 環境においても，良質で多量のインプットを与える機会を提供する。そのことはまた，リーディングにおけるトップダウン処理の習得にもつながると思われる。

【参考文献】 酒井邦秀・神田みなみ 編著（2005）『教室で読む英語100万語―多読授業のすすめ』大修館書店.
島津博文（2005）「研究の実際1 ― Reading 活動 ―」森千鶴ほか「実践的コミュニケーション能力を育てる英語科学習活動の研究」『研究紀要』（福岡教育大学・三附属中学校）14号, pp.170-172.